

Title	Joseph Lortz, Geschichte der Kirche, in ideengeschichtlicher Betrachtung, Munster Westfalen, 17 und 18 Auflage, 1953
Sub Title	
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.1 (1956. 5) ,p.87- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560500-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

てしまつてゐる。

また古代において特に重視すべきは式内社橋神社の存在である。社後の小丘は日本武命が弟橋姫の遺骸を葬つた所と傳え、祭神も弟橋姫を主とし、日本武命と姫の父忍山宿彌を合祀するといふ。勿論町史編纂の企てそのものが恐らくこの古社の存在によつて推進されたものであろうし、人々の信仰の問題と對決することは郷土史の宿命であり、不可避の難事であるかもしれないが、この神社に關する記述、特に日本武命に關する部分が明治時代の史學を一步も出ず、最近の研究に全く觸れていないのは、今日の郷土史として、やはり一考を要する問題ではなからうか。結論は別として新らしい研究の要點を紹介するだけでも、或いは史實と傳説の限界を示唆することも、扱ひ方の如何ではむしろ本書の指導的立場を高める結果となり得たのではなからうか。それと並んで橋神社にある數々の神事や、郷土の行事などに對して、民俗學的な研究が少しも加えられていないのは遺憾の極みである。むしろ、右に指摘したような諸問題を中心に古代の章を編述されたならば、筆者が明瞭に意圖している郷土の民衆の長い年月に亙る生活の諸相が豊かに浮彫りされて来たのではないかと惜しまれてならない。

しかし以上述べた所は、誠に望蜀の願ひであつて、本書の眞價は近世以降における詳細な叙述を含めた全卷を一體として把握さ

るべきものであろう。その意味において、冒頭述べた如く、郷土史中の白眉に屬するものであろうことを重ねて附言しておくたい。

(清水潤三)

Joseph Lortz, *Geschichte der Kirche,*

in ideengeschichtlicher Betrachtung,

Münster Westfalen, 17 und 18 Auflage,

1953.

教會史というものは扱いにくい對象である。第一に、教會というものの本質が超越的な神的啓示にもとづく超自然的超世界的なもので、その制定も運営も目的も究極的には人の手の中になく自然的理據の外にあるからである。しかしそれがこの世界において一つの生命有機體を構成し、信徒の團體として一つの可視的な「國」*Civitas* を成す限り、そして文化・社會・國家の領域に本来的に——偶然的ではなく使徒的使命として——參劃する限り、「歴史」の次元に入ってくる。そこでおのずと教會史の研究には二つの方法が要求される。即ち、教會史を教會の神的源泉からその演繹的展開として見る見方と、教會の營みが人間に托せられ世俗社會と接觸する面から見て、そこに生じうる人間の限界と功罪を事實的にとらえて、それを通じて神意の時間的實現を讀みとつてゆくという行き方である。前者を「教義史的考察」*dogmen-*

geschichtliche Betrachtung といえは、後者は「歴史的考察」historische Betrachtung といえよう。前者は單に知識内容についてのみならず、玄義的部分の知解そのものに特別の神的照明を必要とするので、それはまず何を措いても神學者聖職者の扱ふべきものであろう。後者は歴史的方法の一部門に他ならず、いかなる面からのアプローチも可能であるから、一般の歴史家にも開かれています。後者の意味だけの教會史ならいくらでもある——ランケの「ローマ教皇史」などもこの部類に入る。しかしこれは本来兩者相俟つべきものであつて、後者がなければ教會史の理念は現實の裏づけを失い、前者がなければ教會史の心髓を逸してしまふ。しかも一人の學者が兩方を兼ねそなえることはなかなか難しい。ヨーゼフ・ロルツ教授 Dr. Joseph Lortz (ミュンスター大學で教會史講義、現在はマインツに在る)はこの點でかなり優れた條件をそなえている。尙その上にもう一つの困難がある。それはキリスト教會が史上何度も分裂を経験しているの、そこから宗派的立場の相違が出てくることである。同じキリスト教會史を書きながら、プロテスタントとカトリックではその視點もちがう、評價もちがう。ましてや宗教改革のような教會分裂の歴史的契機を扱うにいたつては、論がおのずから二分するとは避けられない。例えば宗教改革の場合、當時の教會の弊害墮落を歴史的事實として肯定し、改革者ルターの熱烈な信仰を感じとり、宗教家としての偉大さを卒直に認め、したがつて宗教改革

の或る意味での必然性を予感し、しかもルターの犯した誤謬は誤謬として嚴正に追求し、總體的にこの事件の目的からそれを行く悲劇的性格を客觀的に冷靜に把握しながら、それを正統信仰の立場から攝理的に意味づけてゆくことは從來ほとんど不可能なことであつた。プロテスタント側はもつぱらカトリック教會の弊風指彈に急でルターを誇大して英雄視するのに對して、カトリック側はルターの行動人格の分裂面のみを追求してこの運動を地方的なものとして片づけたがる。たしかにこの問題は教會史として相當に難問である。その研究には激しい action と reaction の應酬が「綜合」に向つて動くまで相當の時間が熟しなければならぬ。ロルツ教授はこの難問にようやく成功の緒を見出した。彼の「ドイツ宗教改革」Die Reformation in Deutschland, 2 Bände, Freiburg, 1939. は宗教改革史に一つの終止符を打つたとすら評された名著である。事實この書はカトリックの教會史家が書いたものでありながらプロテスタント側から前例がないほどの好評をもつて迎えられた。非難は反つて皮肉にもカトリック側からの方が多かつたようである(第三版の序文参照)。それは彼の歴史的叙述の嚴正さを物語るものであろう。ロルツは使徒傳承の正統教會的立場に立ちながら歴史的事實の客觀性を保つという立場をとる。そこに當然おこりうる「護教」(Apologia)の問題については、彼は信徒の罪、教會人の過誤——教會そのものは過またない——の歴史は當面の教會の利不利を超えて認めらるべきだ

と主張する。しかし彼のその歴史、史的認識は實證主義史學者のそれではない。事實のための事實という觀念ではない。それは一つの「歴史哲學」——もつと正しくは「歴史神學」——に支えられているのである。それによつて過誤の事實が一段高い次元（神の愛の玄義）から或る意味づけをうけてくるのである。即ち、信徒の罪、教會人の過誤は人間の弱さ（原罪の結果）から来る限り根源的に拂拭しえない——その點で彼は樂天的な近代的（啓蒙的）進歩主義を認めない。それはむしろ上からの救済の業と見るべきで、「罪の増ししところに恩寵いや増せり」（ロマ書 五、二〇）という恩寵の祕義によつて「幸いなる罪」*Felix culpa*とされる契機を待つのみである。外からは迫害、内からは罪過によつて鬨う教會は數々の苦しみを嘗め、人類の悔い改めによつて恩寵の充滿による救いが完成するというプロセスを予見する。教會の歴史的分裂も將來のよりよき一致のための必要な試煉である。よい麥に混じつた毒麥は收穫のとき畑主が抜くまでそのままにしておく、といった思想である。この根本的な態度は、前記「ドイツ宗教改革」*Die Reformation in Deutschland, 1939*の前に書いた本書「教會史」*Geschichte der Kirche, 1932*においてもそのまま變りがない。この「教會史」も五百頁足らずの一冊の本の中に初代教會から現代教會までを手ぎわよくまとめ上げた好著として有名で、現在十八版を重ねている。そしてまたこの本にもその好評に對して半面、カトリック側の一部から教會史のネガティブな面が強く出すぎ

ているという非難がないでもない。しかしこれもまた彼の歴史的事實の重視（例えば墮落聖職者や異端虐殺や宗教裁判はいかなる意味でも辯護しない）と「幸いなる罪」*Felix culpa*の歴史哲學を正當に解すれば、彼の云わんとするところはよく分るはずである。だから彼はこの本において、從來のものとはちがつて、中世の最盛時代の教會を述べるだけに終らないで、それが崩れてもつばら守勢に立たせられて内外ともに困難の多い近代教會の姿にも目をそむけない。否、反つて全體の半分の紙數（約二百五十頁）をこの惱める近代教會のために割いて、その苦しみのあとを縷述する。しかしまたその苦惱を描きながらも、同時にひるがえつて近代ヨーロッパの精神史に一矢をむくいている。傳統的な靈性の優位を顛覆させた近代自然主義の行方、古典的な客觀主義をくつがえした近代主觀主義・懷疑主義のもたらした混亂、普遍主義を切り裂いた分立主義（ナショナルリズム）による近代ヨーロッパ諸國の分裂に對する批判はきびしい。そしてその思想に破産しかかつている現代ヨーロッパ人に傳統的精神への復歸を示唆している。その點でこの本はヨーロッパ史、就中ヨーロッパ思想史・文化史の理解にとつて一つの重要な評價を與えている。われわれの一般歴史書からは宗教改革、啓蒙主義、フランス革命によつて地上から姿を消したかの如くに見られているカトリック教會からこれだけの批判と抵抗が出ていることは一見奇異の感をうけるかもしれないが、それはやはりヨーロッパ人の耳に未だ消えやらぬ聲

ではなからうか。ロルツのいだいている教會史の根本理念は、一言でいえば、(一)ローマ教皇を中心とする普遍教會主義と(二)カトリシズムの総合と中庸と客觀主義の精神である。したがつて(一)から近代の地方教會・國教會主義に對し、(二)から主觀主義に對する批判が出てくる。彼の叙述は特に近代教會についてみると、例えば、宗教改革 Reformation に對する反宗教改革 Gegenreformation の正しい比重の評價、十六、七世紀フランスの靈性のヒューマニズムの昂揚、啓蒙的理論論 (Deismus) 宗教無差別主義 (Tolerance) に對する正統信仰の擁護、フランス革命後の教會再建の努力、ドイツの文化闘争 Kulturkampf に對する抵抗、現代社會問題に對する理解等々の問題が一本の線につらぬかれて有機的に叙述されている。その一貫した見方の統一理念が重大なのである。それは或る意味で近代的形姿の上にはあらわれ、いなくてもその體軀を内から支えているヨーロッパ精神史の背骨といつてもよからう。

しかしこの本に勿論問題がないではない。多分にドイツ中心的な見方であるということが第一。しかしドイツ人がドイツ中心にものを見るということは殆んど誰の場合でも避けられない制限であろう。またスコラ哲學に對する評價も消極的である。彼は現在スコラ哲學がほとんど破産していると云つてゐるが、それはいさゝかローカルな見方で、ラテン世界のカトリシズムには當らない。それにひきかえドイツ觀念論に寛容すぎるのは反つて危険ですら

ある。十九世紀のあげて唯物的傾向に走つた時代にドイツ觀念論がとにかく精神實在を認めた功をプラスと考へてゐるのであるが、その半面の汎神論への結果はもつと大きいマイナスではないか。またコミュニズムについても、その批判はあまりに原則論的で素朴にすぎる。これも方法こそ違へ近代主義の破綻を克服しようとしてゐるのであるから單なる教會の敵ではないはずである。一つ面白いことは、ロルツが現代ヨーロッパはその近代思想の幻滅と無神的傾向の果てに東洋の精神性からの反撃をうけるだろうという予測をたてゝゝいることである。東洋がヨーロッパ人にとつてエキゾティシズムの對象以上に彼等に反撃を加えうるものかどうかは今直ちに明言の至りではないが、また東洋の思想のあの底しれぬグノーシスの危険をキリスト教がいかにか回避するかは彼の説明を聞き得ないが、とにかく他のヨーロッパのキリスト教的思想家とはちがつて、近代的ヨーロッパの清算の前に、東洋思想と對決を考へてゐるロルツの視野は問題にしてよい。

要するにこの本は決して専門的な研究書ではなく、どこまでも教會史の包括的なそれだいて簡明な概説書にとゞまるものである。しかもその概説の主題を副題のとおり、「精神史的考察」 Ideengeschichtliche Betrachtung にしほり、またもう一つの小さな副題のとおり、「キリスト教の過去に對する一つの歴史的意味付け」 Eine geschichtliche Sinndeutung der christlichen Vergangenheit 以上のものではない。ミケランジェロやエラス

ムスやベートーヴェンやブルックナーなどにも相當の紙數を割いていないようないわば教會文化史といつてよいものである。問題はこの本が中世↓近代↓現代ヨーロッパの形成過程を啓蒙史觀とはちがった角度から見ているその視座にあるのである。それがわれわれにとつてヨーロッパを最も内から理解する手がかりとなる一つの逆啓蒙的作用をもつているところに意義がある。ヨーロッパ中心の時代はもう終つたかもしれない。だがヨーロッパのこの古い深い根を無視して單なる表皮の新しさと枝の尖端だけを追つてもヨーロッパの眞姿はとらえられないということを思わせてくれるだけでもこの本の價値は大きい。

尙参考までにこの本の英譯書をあげておく。Joseph Lortz, *History of the Church, adapted from the 5th and 6th German Edition by Edwin G. Kaiser, C. P. S., S. T. D., Milwaukee, U. S. A., 1939.* 英譯はわりに忠實に文意を捉えているので一應信用して讀める。たゞ原著者が美術などにわたつても専門的な術語を使つて正確に述べているのに、それを平易な語にくだきすぎて多少重要なニュアンスを失つてゐる點があるのは惜しまれる。しかしそのためドイツ的固さがくだけて英譯の方が讀みやすいともいえる。だが特に終り近く紙數の關係からか省略個所が多くなるのは残念である。しかもロルツ教授の教會合同論的な歴史哲學的にかなり重要な説明個所が抜けているのは遺憾である。前述したように、この著者の歴史哲學は教會史のネガティブな面の理解にとつて必要不可欠なものだからである。また英

譯者がアメリカのカトリック教會史を書き加えているが、とりたてて云うほどの内容は無い。(神山四郎)

江戸川區史

(A5、折込附圖5、アート寫眞圖版12
頁、本文一三五六頁、索引四八頁、昭和30年3月江戸川區役所發行)

本書は郷土史研究家故木下晴弘氏が、昭和二七年一月以降各方面の協力を得て、銳意編纂に努力せられ、昨年春完成されたものであるが、木下氏は本書の刊行が成つて間もなく、かねて宿痼の病あらたまり永眠せられた。従つて江戸川區史の大著は木下晴弘氏の最後の著述となつてしまつた。

本書の内容を目次によつて紹介すれば

序説 第一章 江戸川區の自然地理 第二章 行政區画の變遷

前篇 古代から江戸時代まで 第一章 考古學から見た江戸川

區 第二章 上代における下總國 第三章 奈良・平安時代

第四章 鎌倉から室町時代へ 第五章 江戸時代

後篇 明治時代から現代まで 第一章 自治制と行政 第二章

區會と公議會 第三章 財政 第四章 土地と建物及び人

口 第五章 教育と文化 第六章 資源と産業經濟 第七

章 保健と衛生 第八章 民生と労働 第九章 交通・土

木・治水・通信 第十章 警察と消防(附檢察と裁判)

第十一章 神社と寺院 第十二章 文化財と傳説、觀光と